

『はじめの一步』

— 第3次「日中不再戦の誓いの旅」に参加して—

(伊藤光隆)

1. はじめに

私は、中国へ行くのは初めてでした。中国大陸への「はじめの一步」を刻みました。

まず、目に飛び込んできたのは、大きな大陸、いっぱいいる人や車、数多く建ち並んでいる高層建築物でした。北京には2千2百万人以上の人が住んでいるとのこと。

また、私の一步は、中国で日中不再戦を誓う「はじめの一步」でもありました。

旅の日程は、下記の通りです。

- 1 日目 北京で中国職工対外交流中心を表敬訪問し
意見交換
- 2 日目 哈爾濱（ハルビン）侵華日軍731部隊罪証陳列館見学
- 3 日目 瀋陽（旧奉天）9・18事変陳列館見学
- 4 日目 平頂山惨案遺址記念館、撫順戦犯管理所見学
- 5 日目 大連市内見学



<大連市>



<1日目>



<2日目>



< 3 日 目 >



< 4 日目 >



< 4 日目 >



< 5 日目 >

それぞれの地で改めて歴史を学び直したり、交流したりすることができました。

2. 印象に残ったこと

この旅で特に印象に残ったことが3つあります。

1つ目は、撫順戦犯管理所での日本軍人への接し方です。

1,000名の日本軍人が収容されていたので、激しく糾弾したかったことでしょう。しかし、日本軍として中国人民に対して行った許されざる行為を振り返らせ、侵略者としての物の見方や考え方を自己変革できるように導いてくれたのです。体力を低下させないよう運動会まで行っていたのには驚きました。

「なぜ、あんなひどいことをしたのだ！」と激しく責め立てられるよりも、「自分はなんてひどいことをしてしまったのだろう！」と自ら気づくことこそ、日中不再戦、平和友好を希求する人間になる道です。

戦争終了直後に、日本軍人に対してこのような対応をとることができた中国人民の凄さを感じました。

2つ目は、どの館の展示もよく工夫されていることです。

どの館にも現地の人や子ども達が来ていました。ここで、一体どのようなことがあったのか。なぜ、そのようなことが起きてしまったのか。小学生にも分かるような展示の仕方でした。

そして、一番感心したのは、過去の出来事の展示で終わりではなく、「私たちはこれからどうすればよいのだろう」ということまで、どの館もしっかり問いかけているところです。歴史は未来をつくるために学ぶのでした。

3つ目は、平頂山惨案遺址記念館の無数(3,000人の村人)の虐殺された人骨です。3つの中でも一番、印象に残りました。50mにわたって人骨が発掘されていました。「この一人一人に生命があって、この一人一人に

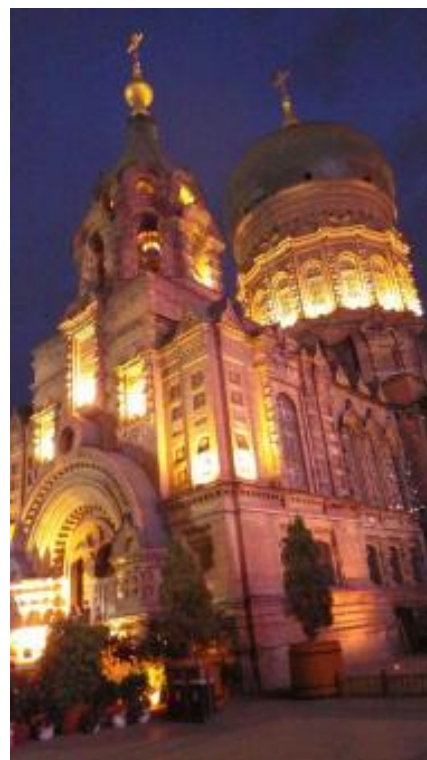
生活があって、それが一瞬にして奪われてしまった。許せない！」と強く思いながら歩きました。途中から人骨が人に見えてきて、対話をしているような気分にもなって涙が止まりませんでした。座り込んで嗚咽しそうにもなりました。こんな体験は初めてです。

3. 終わりに

旅の一週間前に自転車で転倒し、手と肋骨を骨折しましたが、なんとか参加できて本当に良かったです。

「東方のパリ」と呼ばれる哈爾濱（ハルビン）の街の美しさや、夏休みということもあるでしょうが、大連の海辺の公園で見た中国の人たちの朗らかな表情や、通訳の李さんと教育の話をいっぱいしたこと等々も、強く印象に残っています。

私は、日中不再戦の誓いの「はじめの一步」を踏み出しました。次の一步を間違えずに踏み出せるよう、学習や見聞を深めていきたいと思います。



<ハルビン：ロシア正教会聖堂 ソフィスカヤ寺院>



